

# 國學院大學學術情報リポジトリ

高度経済成長と民俗学：  
特集日本民俗学の展望を拓く：  
伝承文学専攻開設二十五周年記念

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 関沢, まゆみ, Sekizawa, Mayumi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000265">https://doi.org/10.57529/00000265</a>

# 高度経済成長と民俗学

関沢まゆみ

## 一、歴史学・経済史学の研究から

民俗学の研究では、歴史学に比べて時期や年代を指標として変化を読み解こうとする試みはあまりなされてこなかった。しかし、高度経済成長期（一九五五～一九七三年）とその前後の民俗伝承の変化を課題にすると、この時代が政治、経済、そして社会の変化が強く連動しているものであるととらえられるところから、やはり隣接する歴史学などの先行研究を確認しておくことは重要であろう。

歴史学の分析視点 民俗学に先行して高度経済成長を対象とした研究が進んでいるのが、歴史学や経済史学の分野である。

歴史学では、一九八〇年代半ばから一九九〇年代前半に、日本の経済大国化を背景に高度経済成長についての本格的な研究が現れてきた<sup>1)</sup>。それら歴史学の研究では、政治、経済、社会の多様な問題が論じられている。一九八五年の『講座日本歴史』（東京大学出版会、一九八五年）には、伊藤正直「高度成長」とその条件<sup>2)</sup>、渡辺治「保守政治と革新自治体」、金子勝「高度成長」と国民生活<sup>4)</sup>などが収録されており、そのうちたとえ、金子勝「高度成長」と国民生活<sup>4)</sup>では、一九七七年五月～八

月に朝日新聞紙上で「新中間階層」論争が展開されたことに関連して、この高度成長を媒介とした「中」意識の拡大の深層を明らかにするには、企業社会を基軸とする日本の競争メカニズムのあり方が問われなければならないという視点を提示し、耐久消費財は所得階層上層から次第に下層へと普及していくため、ある特定の耐久消費財の所有が社会的地位をあらわす象徴になりうるとともに、その下層への普及は平等化と階層上昇の意識を作り出すと述べている。そして、高度経済成長期の人々の価値観を表象する、「世間並み」「他人と同じ」という平等感、「マイホーム主義」の台頭、企業の能力主義的競争原理の導入、「学歴社会」等について指摘している。

次の一九九五年の『岩波講座日本通史』に収めた、中村政則「一九五〇―一六〇年代の日本―高度経済成長―」<sup>5)</sup>では、まず、一九五〇年代は「政治の一〇年」（朝鮮戦争、講和論争、対日講和条約と日米安全保障条約の締結）、一九六〇年代は高度経済成長の本格的な展開期（三池争議と安保闘争の終結、国民所得倍増計画の実施）、そして一九七〇年代は戦後日本の第三の転機（ニクソンショック、米中接近と沖繩返還、第一次石油危機）として、それぞれの時期の特徴を整理し、政治・外交、経済、社会について分析を行なうとともに、高度経済成長が大衆

消費社会を生み出したことなども指摘している。社会変動の面で、「一九六〇年代の変化は有史以来最大であった。農村からの人口流出、都市化が進み、産業構造・就業構造に激変をもたらした」とし、その変化の内容として、一九六〇年には第三次産業の就業者が第一次産業のそれを凌駕し、都市を中心に核家族が六〇%を超え、〈近代〉家族が成立した。子供の教育への投資と学歴競争の熾烈化、一方、農村における専業農家の激減と第二種兼業農家の増加、そして大衆消費社会が生み出されたことなどをあげている。

鹿野政直「一九七〇―一九〇年代の日本―経済大国―」<sup>6)</sup>では、高度経済成長期におこった政治、経済そして人々の生活と意識の変化について解説し、「サラリーマン社会への単色化」という項で、民俗学の視点とも近い人々の生活と意識の変化について、高度経済成長は給与生活者層を大量に生み出し、それはまた一九六〇―七〇年代に日本人の「中流」意識の拡大となつて表れたことを述べた上で、そのサラリーマン社会がもたらした日本社会の変化を三点指摘している。(1) サラリーマンの自己意識としての「社員」という枠組の形成、(2) 社会の都市型化の進行とそれに伴う、住民意識の変化(①一九六〇年代以降の民俗学ブームに表れたふるさと幻影、②一九七一―七四年

にかけての東京ゴミ戦争を契機とする廃棄物処理をめぐって、焼却方式への切り換えと自区内処理の原則が打ち出されたことによる迷惑の公平な負担とゴミ減量化とリサイクルへの意識を高めたこと、③都市を基盤とする新しい住民運動の誕生で主婦層がその担い手となったこと、そして、(3) サラリーマンの中流意識の最大の指標であるマイホーム取得に伴う、家族の变质、である。

さらにその後、二〇一〇年前後になると、大門正克他編『高度成長の時代』(全三卷)において、高度経済成長期を前半期(一九五〇年代半ばから六〇年代前半)と後半期(一九六〇年代後半から七〇年代前半)とに区分しての研究などが紹介され、また荒川章一『日本の歴史16 豊かさへの渴望』<sup>8)</sup>では、一九五五年から二〇一〇年の現在までをおよそ一五年ごとと時期区分して「戦後社会」としての把握を試みている。

そして、二〇一五年の『岩波講座日本歴史』では、大門正克「高度経済成長と日本社会の変容」<sup>9)</sup>で、これまでの高度経済成長をめぐる研究のうちでは、「大企業を軸にした企業社会の研究」と主婦の大衆の誕生に示される近代家族の研究」が重要な貢献であったと位置づけており、それは前述の中村政則「一九五〇—六〇年代の日本—高度経済成長」が、「企業国家の成立」、

「大衆消費社会の成立」、それと近代家族の大衆規模での成立と女性のライフサイクルの変化について述べていた点を再確認したものと見えよう。そして大門は、高度経済成長期の前半期の特徴として企業社会の形成が始まったことや近代家族の大衆化などをあげ、後半期の特徴として企業社会のいっそうの統合強化と消費社会の進展、企業社会の矛盾や近代家族の矛盾、在日朝鮮人の教育権・生存権など「日本社会への問い直し」があらわれた」ことなどをあげて、それらの「高度成長の構造—動態—社会変容」の動態を相互連関的なスバイラル的展開としてとらえている。

**農村の変化** 次に、農村の変化については、たとえば永江雅和「二つの農村」<sup>10)</sup>は、東京大学の西田ゼミが一九六〇年代から始まった農村構造・農家経営の変化の具体的な調査事例とした岩手県紫波郡紫波町志和地区と、茨城県稲敷郡東村(現稲敷市)平須地区の調査研究をもとに論述されたものである。永江は、この二つの事例が、「農家の個々の経営的対応にとどまらず、農協を単位としたある種の地域社会のデザインを提示」している」と述べ、その内実と結末がまとめられている。(1) 水稲単作地帯だったのが、稲作を基軸とした有畜複合経営が導入された。一九六〇年代は、食糧管理制度による米価安定を背景に、

志和地区では肉牛・シイタケ、平須農場では酪農・養豚に、農家の多くが比較的低いリスクで複合部門に取り組めた点を評価している。(2) 志和農協では「出稼ぎのない村」、平須農場では「協同による余暇のある農村」をそれぞれ指導者が目指していた。両地区とも農家の所得上昇を実現したが、志和では出稼ぎは解消せず、平須でも共同経営が解体し、農家が「がむしゃらに働きはじめた」。これについて、永江は「農業技術の変化と耐久消費財の普及が、農村社会・家族に与えた変化」だと指摘する。「三ちゃんでも可能な農業」(耐久消費財を購入して労働を軽減する)が実現した一方、「耐久消費財を購入するため」に労働する」というふうに順序が転換していったことに注目している。(3) 農村の担い手について、高度経済成長下の社会変動が近代以前からなる農家構成員の意思決定を多様化させたことを、志和の女性たちのシイタケ栽培をはじめ複合部門への積極的参加、平須の後継者の経営継承不全などの実態から指摘している。

なお、志和地区についていえば、シイタケ栽培を女性たちが担うようになり、農家の所得が増加したが、冬季出稼ぎも減少しなかった。現金収入によって、耐久消費財が購入され、一九六〇年代前半に白黒テレビ、プロパンガス、一九六〇年代

中盤から電気洗濯機、冷蔵庫、そしてオートバイ、一九七〇年代には乗用車が普及していった。カラーテレビと掃除機などはぜいたく品とみなされ裕福な家庭でまず購入され、一定の階層格差をもちながらも高度成長期に全階層的に普及した。この「家事労働の軽減や兼業機会の拡大に貢献する財の導入が複合化や兼業の可能性を広げていった点が重要である一方、白黒テレビのように、直接経営向上に貢献しない財が最も急速に普及していった点に、農村が大衆消費社会に包摂されてゆく過程」がみられると述べている。

また、加瀬和俊『集団就職の時代―高度成長のいない手たち』<sup>[13]</sup>や、同『農村と地域の変貌』<sup>[14]</sup>がある。前者では、集団就職の昭和三〇年代と四〇年代との違いを具体的な統計から分析している。昭和三〇年代の集団就職は中学卒業者を対象とし、彼らが、低賃金、居住環境が悪くても文句を言わない、そして技術の呑み込みが早いなどから「金の卵」と呼ばれていたこと、それが昭和四〇年代になると地方でも高校進学率があがり、集団就職も高校卒業者が主な対象者となっていたことを統計資料から具体的に指摘している。後著では、一九六〇年前後の世代別就業機会・世代別の就業選択の背景に、家単位で農作物を作るという目的に沿ってではなく世帯総所得(個人所得)の最

大化をめざす経済計算があったことや、モーターリゼーションの効果として、農家世帯員の通勤圏拡大とそれによる第二種兼業農家の増加、②農家世帯員の世代別・個人別の独自行動（若夫婦、嫁の自立化）が可能になったこと、などが指摘されている。そうして、農村は一九六〇年代に変化し、一九七〇年代に変化が定着し、選択の自由が確立したと述べている。

このように経済史学による高度経済成長と農村の変化は、その時代に特徴的な統計データに基づく分析がなされているのが特徴といえる。浅井良夫が経済史学と民俗学との関心の違いについて、「経済史家は、高い経済成長がなぜ実現したのかを究明しようとし、民俗学者は高度成長を通じて人々の生活や慣習がどのように変化したのかに関心を抱く」と述べているように、高い経済成長がなぜ実現したのか、を説明しようとする経済史と、長いスパンで民俗の変化をみようとする民俗学といえる。同じ高度経済成長という問題を対象としながらも、その視点の置き方が研究分野によって異なることがわかる。その上で、民俗学がその独自の研究開拓をめざすとき、それら歴史学や経済史学の動向やその成果から学ぶ点は多いであろう。

## 二、民俗学における高度経済成長の研究例

では、民俗学の分野で高度経済成長期の民俗の変化を意識して行なわれた研究の一部を紹介してみよう。

**農村と山村の生業変化** 第一に、『国立歴史民俗博物館研究

報告』第一七一集（高度経済成長と生活変化<sup>16</sup>）である。これは、総合展示第六室（現代）の「高度経済成長と生活の変貌」コーナーの基盤となった共同研究（二〇〇七～〇九年度）の成果で、経済史学と民俗学、植生景観史等の学際的な共同研究であった点がその特徴である。具体的には、①都市と農村、②生産と消費、③衣食住の変化、の三つのテーマを設定して研究が進められた。本書においては、新しく生まれた団地の生活、農村および農業の変化、地方都市の変化、人の移動（出稼ぎ）、山村の変化、燃料の変化と植生景観の変化、などの論文が収録されている。このなかで、前節の永江論文のように農村を扱っているのが、新谷尚紀「高度経済成長と農業の変化―日本民俗学からの一試論<sup>17</sup>」である。ここでは、一九五〇年代半ばから一九七〇年代半ばにかけての農業の変化（機械化と化学化、増産から減反政策へ、兼業化へ）の数値データと、国の農業政策

の推移を概観したうえで、広島県の中山間地農村の事例分析を行ない、「全体から部分へ」というアプローチの手法が試みられている。高度経済成長期を経て、個々の農家の後継者がいなくなつた時、農地を維持するための対応についての指摘が注目される。それは、一九九〇年代以降、政策的に試みられてきた個別営農から集団営農（農事法人の結成または受託営農会社への受託など）へ、という変化とその実態の分析から、農業の維持継続のためには、A…農業収益には依存せず生活は給与所得でまかない農地と集落を維持するタイプ、B…農業収益を重視し生産と販売の努力と経営多角化により農業を維持するタイプ、との両極があることと、その中間型が現実的な多様性を示していること、そしてその背景としての農民精神 agricultural spirits の存在、つまり、A…耕地と集落を維持しなければならない、B…過疎化の中で荒廃すると耕地を放つてはいけない、農業を維持しなければいけない、という精神であり、それらが現場ごとに具体的に存在していることを指摘している。

また、山村の変化については、湯川洋司「高度経済成長と山村生活の変化」がある。それ以前に、田中宣一が成城大学民俗学研究所による「山村生活五〇年 その文化変化の研究」(昭和五九―六一一年)の調査結果をふまえて、「収入源として、ま

た食糧供給の場として、さらには燃料や建築資材採取の地としての山の価値は次第に低下して」いったが、それは昭和三〇年代後半であり高度経済成長の影響が大きいこと、それによって「山離れ」が進んだことを指摘していた。それに対して、湯川は、福島県南会津郡只見町布沢、愛媛県西予市野村町惣川、熊本県球磨郡五木村の山村の統計資料と調査から、田中がいうように山の生活の変化が「高度経済成長の影響」すなわち「外部的要因」によって生じたと断定するには、もう少し検討の余地があるとして、山村が「山村内部の自立的経済体制の崩壊」に対応できなかったことに注目して、「山村生活の変化とは、従来の山村構造が変化しつつあるその時期に高度経済成長が重なって、その影響が一段と大きく強いものになった可能性」があると指摘している。そして、「山の仕事の消失に伴い人々の間の「互助」的關係が失われていった」ことも指摘している。たとえば五木村では猪が獲れた時は、集落の人皆で分配する。ヤマワケ（山分け）である。そこには山の幸、山の資源は山の神が授けたものだという考え方が共有されていたからだという。昭和六〇年代以降、そのような山の神の信仰と人々の生活の協同性が消失してきた。数値ではとらえられない伝統の生活律の伝承が途絶えたといえる。それでも、「限界集落」<sup>20</sup>というところさえ方

があるなかで、現在、人びとの間では山の資源を活用しようという「脱成長」「山戻り」の試みが各地でなされているという。湯川の高度経済成長と山村生活の変化を読み解く視点も、昭和三〇年前後から現在に至る、長い時間軸のなかでその動態を読み解こうとするものである。

**都市型生活への出発点** 第二に、国立歴史民俗博物館編『高度経済成長と生活革命―民俗学と経済史学との対話から―』<sup>(21)</sup>である。前節で述べた数値の関連では、岩本通弥「現代日常生活の誕生―昭和三七年度厚生白書を中心に―」<sup>(22)</sup>で「東京オリンピックの開催に向けて、東京が、また都市生活者の暮らしが大きく変貌を始める画期」とされる昭和三七年度厚生白書などの、主に統計数値をもとに、都市の生活変化について分析し、現代の私たちの日常の形成過程であるとしている。論点は、①都市勤労者家族の「器」としての公団・公営の住宅団地（「nDKモデル」）によって、核家族による新しい生活スタイルが標準化した（ただし、戦後の家族が核家族化したという言説は間違いで、戦前から核家族率はほぼ一定していると指摘）。②団地の内風呂、水洗トイレ、食寝分離のDKの設置によって「清潔で衛生的な暮らし」が日常化していった、などである。本稿は省庁が発表した白書等の数値をもとに家族や団地の生活を概観し

ているが、やはり民俗学としては、具体的な生活者への聞き取りがなされていないため個別の実態への追跡が広く求められているといえよう。

**村落生活の変化** また、関沢まゆみ「高度経済成長と地域社会―展示パネルの紹介から―」<sup>(23)</sup>で、これまでの村落研究のテーマであった「村境」の問題を、高度経済成長期のバイクや自動車の普及による人々の移動の自由という視点だけでなく、村落意識の変化、つまり、村落間の領域意識の曖昧化と地縁関係の相対化という面で捉えるという新たな視点を提示した。かつて、さまざまな儀礼や信仰の上で多彩な意味をもっていた村境が、モーターゼーションによる移動の高速化と自由化によってその意味が変化したり曖昧化したりまた無化したりしているという変化についての注目である。民俗学では、このようなモーターゼーションも含めて、技術や物質の変化が人びとの意識や生活感覚にどのような影響を与えているかについて調査分析をしていくことが肝要であろう。

このほか、農村や農業の変化では、生活改善運動、新生活運動の展開を追跡した田中宣一編『暮らしの革命―戦後農村の生活改善事業と新生活運動―』<sup>(24)</sup>や、一九六〇年代に大規模な稲作単一経営のモデル農村として建設された秋田県大潟村における

一九六〇年代後半から七〇年代前半の機械化への対応について論じた渡部鮎美「機械化転換期における稲作技術の多様化とリスク―秋田県大潟村を事例に―」<sup>(26)</sup>などがある。渡部は、農家が新たな技術を生み出した過程の検討から、他の生業や作物をリスクの担保にするケースが多いなか、大潟村ではリスクを背負いながら稲作単一経営でやってきたことについて農家の労働観にその特徴を見出している。また、市町村史においても現代編とともに民俗編において高度経済成長期の市町村地域の生活の変化が、この時代の体験者の語りとともに記録されるようになってきている。<sup>(27)</sup>

**変遷と伝承と** 民俗学がこれまで研究を蓄積してきた社会伝承、経済伝承、儀礼伝承、信仰伝承などの各分野において、高度経済成長期とその前後の変化に注目した研究の必要性が認識され、その調査と研究が進められているのが現状である。高度経済成長がなぜ実現したのか、また高度経済成長期の時代的特質の究明や、この時代に特徴的な事象への統計資料をもとにしたの着目、など、歴史学や経済史学の視点をも活用しながら、民俗学ではさらに、生活感覚や人々の意識の変化などに注目していくところが重要であり民俗学の特徴でもある。そして、民俗の変遷の動態についての分析も重要である。変化の早い民俗

伝承と変化の遅い民俗伝承となかなか変化しにくい民俗伝承、そして、変化の早い地域と変化の遅い地域となかなか変化しにくい地域、というような変化における多様性についての比較研究の視点も重要である。とくに、地域の伝統行事の中でその地域社会の歴史と由緒と伝承を強く意識しているような地域での調査は、民俗の変遷と伝承の研究の上では有効であろう。民俗学が注目するものの一つが民俗の伝承力だからである。

### 三、生活変化の中にも伝承力

#### (一) 美保神社と宮座祭祀

民俗学の視点の特徴は、生活の変遷と伝承の両方に注目する点にある。そこで、変化のなかの伝承力という視点から、和歌森太郎以来、民俗学の研究蓄積のある島根県旧八東郡美保関町（現松江市）にある美保神社の宮座の事例からみてみたい。<sup>(28)</sup>美保関は島根半島の東の突端近くの小湾に位置し、自然の良港として、近世には東北地方と大坂を結ぶ西廻航路や蝦夷地と畿内を結ぶ航路が開け、北前船の寄港地として栄えた。そして、港から続く参道を上がって山側にある美保神社は、海上安全を祈願する参拝者が多く訪れている。この美保神社の祭祀組織にお

けるトウヤ(頭家)については、昭和二〇年代までのあり方と歴史については和歌森太郎『美保神社の研究』<sup>(28)</sup>があり、当時の文部省国民精神文化研究所の調査(昭和一七―一九年)をもとに刊行されている。神社の祭祀を行なう頭家は頭筋と呼ばれるいわゆる株を有する家の長男から神籤によって決められる。もともと、頭筋は「明神さんの子孫といわれる十六流の家」(十八流の家という説もある)で、和歌森の調査当時、本家分家をおわせて八〇戸あった。

一九九七年の頭屋筋の開放 この頭筋の伝統は長く維持されてきたが、平成九年(一九九七)に頭筋の開放が決定され、一般の氏子でも希望する場合は頭家をとめる資格を認めることとなった。その背景には、平成一〇年(一九九八)の遷宮の資金集めの苦勞があり、また頭家をとめる希望者が減少していたことがあった。そこで頭筋を開放することによって、宮座祭祀の維持、継承をはかったのである。美保神社では、『古事記』の神話に基づくといわれる、春四月の青柴垣神事、冬の二二月の諸手船神事を中心にその年間祭祀が行なわれている。四月七日の青柴垣神事の頭家は、一の頭家と二の頭家の二名が選ばれ、一年間精進潔斎して神祭り役となる。これをつとめると次の段階の準官となる。準官のなかからまた神籤があがると、客人頭

と呼ばれる客神社の頭家をつとめ、翌年一年は休番、二年目に上席休番、そして三年目に頭人という、宮座組織のなかで最も責任のある役を果たすことになる。頭人は、四月一日に頭人宮と呼ばれる御神体の「お面の神様」を安置した美保神社の建築模型を引継ぎ、これから一年間、精進潔斎をして、頭人宮を責任をもつてまつり、毎晩、美保神社へ参拝し、頭人口伝の祝詞をあげ、村内安全などを祈願する。

宮座維持とそのための変更 昭和三八年(一九六三)から、美保神社にある神事会所の東側に頭人宮を設置することとなったが、それ以前は、頭人の自宅の二階の部屋にまつっていた。その自宅でまつっていた頃は、毎月一日、七日、十五日、二十八日には一般の参拝者がお参りに来て二階に上がっていた。また頭人への祈念の依頼も多くあったといわれており、それは美保関の外の人が尋ねてくる場合もあり、内容は絶対口外しないことになっていたが、たとえば豊漁繁盛、旅行無事、手術の成功、戦時中には出征兵士の武運長久など氏子の無事安全を祈願するものであったという。依頼を受けた頭人が、深夜、潮をかいで清めてから美保神社にあがって神にその内容を尋ねても「おさとしが見えない」ともう一度海に入って清めてから社参を繰り返していた夫の苦勞していた姿を伝えている大正一四年生まれ

女性もあつた。

頭家になると、四月七日の青柴垣神事では、もとは一の頭家、二の頭家、それぞれ自宅に御神饌を供え、幡などの神事のしつらえを用意したもので、人びとも頭家の家にお参りにいったが、やはり、昭和三八年からは、現在のように神事会所に両頭家が並んで座し、人びとの参拝を受けることになつた。

四月七日午後から、青柴垣の神話を模して、船に移動して秘儀が行なわれる。その後、神社にあがつて、奉幣の儀が行なわれる。そして美保神社宮司が神籤をあげる。そうして、新しい頭家二名の頭差しが行なわれると、すぐに潮をかき神社に参上する。それから、一年間、その新しい頭家は毎日潮をかき、美保神社へ日参を行なう。日ごろから、葬式や墓地など死穢を避ける、鶏卵を食さない、大鉢の料理に箸をつけない、雑踏に行かないなど、清浄を保ち、言葉使いにも気をつける生活が続く。

昭和三〇年代になると、潮かきをせず、風呂で水を浴び、塩で清めてから社参を行なうようになってきた。また、その後、息子が美保関を出て東京などで仕事をしていて、神籤があがつた場合には、父親が代理で日参することが認められた。ただし、青柴垣神事には本人が帰ってきて頭家をつとめ、やがて客人頭の神籤があがつた時には、仕事を辞めて美保関に帰つてく

ることが条件であつた。

福岡隆氏(昭和一九年生まれ)も頭家の神籤が当たつた時に、仕事していた東京から妻と子供二人を連れて美保関に帰つてきた一人である。「仕事は二の次」で、まず頭家のつとめをつとめることが重要であつたという。そして頭家をつとめて以来、それからは美保関で実家の旅館を継ぎ、客人頭から頭人までのつとめを果たしてきた。同様に、長男も大学卒業後、埼玉県内で就職していたが、やはり頭家の神籤があがつたら、美保関に帰つてくるようにと言っているという。「日本中、世界中どこにいてもいい。しかし、軸足がこの美保関にあることだけは忘れてはいけない」という考えだという。その軸足というのが、美保神社の神事祭礼を頭家として、頭人としてつとめることによつて確認できるものだと考えているといえる。

ここからは、父の代、祖父の代、さらに先祖代々つとめてきた美保神社の宮座のつとめを頭家として、頭人としてつとめることが、頭筋の家の者のアイデンティティ(存在意義)の確認であるという、経験に裏付けされた強いメッセージを読み取ることができる。

このような事例は、この美保関の宮座に限らず、兵庫県加東郡社町上鴨川の宮座の若者が、住吉神社の一〇月四、五日の秋

祭に行なわれる神事舞の練習には大阪などに住んでいても必ず帰ってくる<sup>20</sup>とか、三重県神島の正月のゲーター祭りにはやはり島外に出ている親戚の若者たちが帰ってきて祭りに参加する<sup>21</sup>など、多々ある。ここからわかることは、村の歴史と由緒を背景に、父や祖父、先祖が伝承してきた祭りは、社会が変化しても一定の強い伝承力を有しているという点である。その継承の力は、自分の軸足の場所の確認、自己存在の確認という内的な力によるものと観察される。

高度経済成長期から五〇年余りがたつ現在、村落や民俗の現場にどのような変化が起きているのか、長いスパンでその変化の動態をみていくことが重要であり、民俗伝承の伝承と変遷に注目する民俗学にとってそれが基本的な視点といえる。

## (二) ダム建設と集落移転

戦後の日本各地の山村では、灌漑、治水、電力供給などを目的に、多目的ダムが建設された。食糧増産、国力の回復などが期待され、まさに昭和三〇年（一九五五）以降の高度経済成長に貢献することとなった。その一方、ダム建設予定地の山村集落は移転を余儀なくされることとなり、この移転体験者も現在ではもう七〇歳代、八〇歳代の高齢になっている。失われた集落とそこでの生活伝承についての調査も民俗学の重要なしごと

であった<sup>22</sup>。そこで、筆者もその移転体験者への聞き取り調査を行ない、現地見学を実施してその移転の前後における生活変化の動態についての調査を試みている。

昭和三〇年代の移転と昭和四〇年代の移転 具体的には、高度経済成長期初頭の昭和三〇年代前半に集落移転をした事例を二つ、一つは広島県北広島町の榎床ダム、もう一つは岩手県湯田町の湯田ダムであるが、もう一つその参考枠として、高度経済成長期の最末期に計画されそれから約二五年もかかって集落移転へと至った事例を一つ、広島県安芸太田町の温井ダムを主な調査対象とした。そのうち、広島県太田川上流の北広島町の榎床ダム（一九五七年完成）、同じく太田川上流の安芸太田町の温井ダム（一九七四―二〇〇一年）、そして、岩手県北上五大ダムの一つ、湯田ダム（一九六四年完成）の三つのダムの建設による移転体験者へ、移転前の生活、移転に対する態度（補償交渉の仕方、反対運動の程度、寺社や墓地などの移転、記録作成など）、移転先と移転方法の選択（集団か個人か）、生活再建、同郷会などについて、基準となる調査項目を作成して調査を進めてきた。広島県の榎床ダムと岩手県の湯田ダムとの比較で浮かび上がってきたのは、同じ昭和三〇年代に移転を経験した人びとの対応にも、A…農村の定住型の集落か、B…鉱山

で栄えた移動型の集落か、による違いが顕著だということであった。

それに対して、昭和四八年（一九七三）の「水源地域対策特別措置法」施行後の、温井ダムの事例の場合では、補償金だけでなく集団移転先の確保と生活環境の整備についても住民が国や県に要求するなど、移転後の生活再建意識に大きな違いがあることが明らかになった。<sup>(33)</sup>

なお、移転後の生活では、燃料が薪炭からプロパンガスへ、水が井戸水から水道水へと変わった。また、昭和四〇年代以降は、自動車普及し、都市部では代替地の田畑がアパートへ変わるなど、大きく生活環境と生活様式が変化した。エネルギーの変化によって実現した都市型生活は「文化生活はお金がかかる。けれども新しい家はいい」（昭和三年生まれ）というのが多くの体験者たちにとっての実感であったという。

集落消滅の危機の中で顕在化した親方百姓精神 民俗学の比較論的研究として、そのような複数の調査事例を調査して、その異同についての分析を重視したが、その中で、福島県の田子倉ダムと広島県の榎床ダムという、昭和三〇年代のダム建設とそれに対する水没集落の人たちの対応が注目された。当時、それらの山村の中には貧富の差が大きかったが、それが内部のい

さかみや対立や闘争という形ではなく、富める者が貧しい者の面倒をみるという近世以来の、いわば親方百姓的な役割がまだこれらの山間集落では共通して生きていた可能性があるということが注目された。それは水没と移転という集落の一大危機の到来に対してその集落が潜在的に蓄積し伝承してきた共同体的力量が顕在化したものととらえることができた。田子倉ダムや榎床ダムなど、昭和三〇年代のダム建設では、昭和四七年（一九七二）の「水源地域対策特別措置法」が制定される以前であったため、水没予定地の生活環境や産業基盤等の計画的な整備事業は考慮されず、補償基準の設定も曖昧であった。その昭和三〇年前後というのは、山村の生活の中では貧富の差がひじょうに大きかった。田子倉では、「十三軒ほか持ち」と呼ばれる旧家筋の家々が話し合い、補償額が少ない家々に対して調整をしたり、榎床では、後藤吾妻氏という「図抜けて持っていた」とされる資産家が、貧しい者たちの面倒をみるというかたちで、それぞれが移転先を見つけて生活を再建していくことができたのである。<sup>(33)</sup>

これらの集落の移転時には、家を壊して材木を移転先に運んでそれを使用して家を建て直す、墓地を移す、など家ごとに準備が進められたほか、田子倉では氏神の若宮八幡神社をダム湖

がみえる高台に移転した。樽床では神社が焼失したために再建はしなかった。また、各家でもう使用しないことになる農具や生活用具の収集保存も行なわれた。そして、移転前あるいは移転後に、村の有志によって村の歴史記録の刊行もなされた。田子倉では移転前に、『田子倉の歴史』と四季折々の村の様子を写真にとっておさめた『田子倉アルバム』が作成されて全戸に配布された。樽床では移転後、昭和四五年に『樽床村誌』<sup>34</sup>が刊行された。

そして、それぞれ新しい居住地を求めて移転していった人たちは、移転後、年に一回、故郷会の集まりを続けてきている。田子倉ではたぐら会といって、九月五日の神社の祭礼の日にダム湖の上に作られた若宮八幡神社に集まって神職にきてもらって祭典を行なった後、只見町の町場の、やはり移転してきた旅館二軒を交代で利用して親睦会を行なってきた。樽床でも親睦の樽床会が広島市内で行なわれている。このような移転後の故郷会の継続には、故郷とのつながりの維持志向性の強さがあるかがえる。しかし、移転体験世代が高齢化していく中で、故郷も解散される動きの中にある。次世代は旧世代の思いを継承しないのである。ここには「親は親、子供は子供」という世代間の断絶が明確にみられる。直接の体験世代のみが記憶のな

かに故郷をとどめているといえる。

#### 山人言葉の伝承

かつて、昭和九年（一九三三）——一九三六年（一九三六）に、柳田國男が山村調査を計画したときの目的の一つにあったのは、平地人とは異なる山人の生活伝承のその痕跡でもよいからということとその発見であり、それにとめようとしたのであった。しかし、そのときの調査地は机上で地図を見ながら選んだものであり、そこはほんとうの山村ではなく、「ただ奥まった農村といふに過ぎなかった」といい、だからその山村調査は失敗であったと述懐しているのである。柳田が『遠野物語』以来、抱き続けてきていた平地人とは異なる、山人の生活文化伝承をその調査では把握できなかったのであった。

福島県南会津郡の田子倉には、「ターザン」と呼ばれていた大塚方氏（一八九四—一九七三）と息子の正也氏たちがいた。彼らは、昭和三四年（一九五九）に田子倉ダムに水が貯められてからも、「泊り山」といって山小屋に泊まって熊狩りを続けていた。熊狩りには日帰りで行なうのもあったが、人間の臭いを避けるには泊り山のほうがよいとされ、この大塚氏一族が代々山小屋を守ってきたのである。しかし、マタギの人たちが現役を引退し、山言葉も消滅寸前になっていた平成一七年（二〇〇五）に、代々、口頭で受け継いできた「泊り山」や山

の掟、狩猟の方法、山言葉などを初めて文字にして記録に残した。それが、大塚正一記録の『只見ターザン マタギ一代』<sup>⑧</sup>である。

田子倉のマタギの山言葉として、「マタギ」（狩人）、「ヤマサキ」（狩人の長）、「メアテ」（狩りの指示役）、「イライ」（長老）、「サツアテ」（男）、「タマアテ」（女）など人を表すもの、「カツテ」（上）、「イデシ」（下）、「ヤス」（穴）、「ツオ」（沢）、のよな方向や地形を表すもの、動物や身体の部位を表す名詞などと、動詞を中心に九八の言葉が記されている。そのなかで、注目されるのは、「コシマイタ」（熊獲った）、「カラクリ」（外に出た）、「サイカリ」（水をあびる）、「ハヤトリコザクナ」（手を打つな）、「ホオテイのカリタツサイトラしてきた」（雪の上道を急ぎ帰って来た）など、一定の文法を伴う言語が記録されていることである。しかも、この山言葉を話せるようになるのは簡単ではなく、「うっかり話せば里言葉が出る。とたんにゲンコツが飛ぶ。次男正司兄貴は狩りが終って帰ってくる頃には頭中コブだらけ、三、四年はつらい思いをしたという。厳しい厳格な掟である」と書かれている。実際に、次のような話し言葉になる。

「コシマキは皮をはぎソヤコをハヅシナカノサカサンマイノ

ウを取り出し、スクマ初め全員がユキサキにイクサカケシテホオテイのカリタツカツテを廻って帰ってくる。俺はスクマにシヤカイのーにコシマイタ事を知らせろ、タクサブンケツム用意しろトツヒと言われホオテイのカリタツサイトラしてきた」、つまり、「熊は皮を剥ぎ、全身を切り、熊の胆、肺、大腸小腸を取り出し、山先初め全員が山神様に参拝して雪の上かみを廻って帰ってくる。俺は山先に子供の一に熊獲った事を知らせろ、米の飯食う用意しろ、行けと言われ、雪の上道を急ぎ帰って来た」という意味の話し言葉である。

これは、昭和三〇年代初めの田子倉ダム建設によって消滅したマタギの言葉や熊獲りの方法などの習俗が、平成になって、いよいよ継承者がいないという危機感のなかで書きとめられた貴重な記録資料である。この事例以外にも、日本各地の民俗調査によって、現在でしか発掘確認しておくことのできないような歴史的な伝承情報は少なくないと思われる。高度経済成長期に消滅していった民俗は少なくない。しかし、その残存を現在可能な限り発掘しておくことも民俗伝承を研究する学問としての民俗学の重要なしごとといえる。

#### 四、論点

本稿で論じた事柄をまとめておくならば、およそ以下のとおりである。

(一) 生活伝承と生活変遷という問題を研究する民俗学が、高度経済成長という歴史的現象を対象化する場合には、隣接する歴史学や経済史学の研究動向にも目配りしてその研究成果を批判的に参照することが重要である。

(二) 民俗学の研究動向についてみると、農村の生活変化と山村の生活変化が具体的な調査地の選定によって進められた作業例が目目され、また高度経済成長期をもって現在につながる都市型生活の出発点とみる視点が提示されるなどしているが、生活文化の伝承研究をその中心的なテーマとする民俗学にとつて、これからさらに研究蓄積が必要なのが現状である。

(三) 筆者が取り組んだ研究例として紹介したのは、①伝統的な神社祭祀と宮座祭祀の伝承実態についての事例分析と、②ダム建設によって集落移転を余儀なくされた山村集落の複数の事例の比較研究、であった。①では、生活の大変化の中にあつても伝統的な文化を伝承し続けようとする人びとの工夫と努力

の中には、何を残し何を止めるか、という伝承をめぐる取捨選択の力学関係が存在するが、そうした中でもとくに地域社会の歴史と由緒と伝統についての人びとの自覚とその共有が、民俗の強い伝承力を支えているということが追跡確認された。②では、一つめは、ダム建設によって集落移転が強制されるといふ人びとの生活と存立の危機の中で、それぞれの村落が長い歴史をもつ定住型集落か、鉱山開発によって一時的に栄えた移動型集落かによって、人びとの対応にも差異が認められた、二つめは、昭和三十年代と四十年代という移転の時期と政策上のちがいと人びとの対応の違い、三つめは、集落消滅という危機の中でそれまでの村落生活の蓄積の中に潜在していた有力家の親方百姓精神の顕在化という現象がみられた、四つめは、ダム建設で水没する山村の中には、かつて柳田國男が山村生活調査などで追跡しながら確保できなかった山人の山人言葉とその生活伝承の痕跡が発見される可能性がある、などの諸点を指摘した。

(四) 高度経済成長期を経る中で消滅していった民俗伝承も数多いが、いまからでも可能な限りそれらの伝承の残存と変容の実態を追跡しておくことが民俗学にとって重要である。

- 注
- (1) 大門正克「はしがき」大門他編『高度成長の時代』第一巻「復興と離陸」、第二巻「加熱と揺らぎ」、第三巻「成長と冷戦への問い」、一・二(二〇〇一年)、三(二〇〇一年) 大月書店
- (2) 伊藤正直「高度成長」とその条件』『講座日本歴史11』東京大学出版会 一九八五年
- (3) 渡辺治「保守政治と革新自治体」『講座日本歴史12』東京大学出版会 一九八五年
- (4) 金子勝「高度成長」と国民生活』『講座日本歴史12』東京大学出版会 一九八五年
- (5) 中村政則「一九五〇—六〇年代の日本—高度経済成長—」『岩波講座日本通史21』岩波書店 一九九五年
- (6) 鹿野政直「一九七〇—九〇年代の日本—経済大国—」『岩波講座日本通史21』岩波書店 一九九五年
- (7) 前掲書注1
- (8) 荒川章二『日本の歴史16 豊かさへの渴望』小学館 二〇〇九年
- (9) 大門正克「高度経済成長と日本社会の変容」『岩波講座日本歴史19』岩波書店 二〇一五年
- (10) 上野千鶴子『家父長制と資本制—マルクス主義フェミニズムの地平—』岩波書店 一九九〇年
- (11) 永江雅和「二つの農村」前掲書注1、第三巻「成長と冷戦への問い」所収
- (12) 西田美昭・加瀬和俊編『高度経済成長期の農業問題』日本経済評論社 二〇〇〇年
- (13) 加瀬和俊『集団就職の時代—高度成長のいない手たち—』青木書店 一九九七年
- (14) 加瀬和俊「農村と地域の変貌」『日本史講座10 戦後日本論』東京大学出版会 二〇〇五年
- (15) 浅井良夫「日本の高度経済成長の特徴」国立歴史民俗博物館編『高度経済成長と生活革命—民俗学と経済史学との対話から—』吉川弘文館 二〇〇一年
- (16) 新谷尚紀・関沢まゆみ編『国立歴史民俗博物館研究報告』一七一(高度経済成長と生活変化) 二〇一一年
- (17) 新谷尚紀「高度経済成長と農業の変化—日本民俗学からの一試論—」前掲書注16所収
- (18) 湯川洋司「高度経済成長と山村生活の変化」、前掲書注16所収
- (19) 成城大学民俗学研究所編刊『山村生活五〇年その文化変化の研究』(昭和五九年度調査報告・一九八六年、同六〇年度・一九八七年、同六一年度・一九八八年)
- (20) 「六五歳以上の高齢者が集落人口の五〇%を超え、独居老人世帯が増加し、このため集落の協同活動の機能が低下し、社会的共同生活の維持が困難な状態にある集落」で、やがて消滅するとされる(大野晃『山村環境社会学序説』農山漁村文化協会 二〇〇五年)
- (21) 国立歴史民俗博物館編『高度経済成長と生活革命—民俗学と経済史学との対話から—』吉川弘文館 二〇一〇年
- (22) 岩本通弥「現代日常生活の誕生—昭和三七年度厚生白書を中心に—」、前掲書注21所収
- (23) 関沢まゆみ「高度経済成長と地域社会—展示パネルの紹介から—」、前掲書注21所収
- (24) 田中宣一編『暮らしの革命—戦後農村の生活改善事業と新生活運動—』(農山漁村文化協会 二〇一一年)
- (25) 渡部鮎美「機械化転換期における稲作技術の多様化とリスク—秋田県大潟村を事例に—」『国立歴史民俗博物館研究報告』一六二 二〇一一年

- (26) 高知市史編さん委員会編『地方都市の暮らしとあわせ 高知市史民俗編』二〇一四年ほか
- (27) 関沢まゆみ「神社祭祀と宮座運営―美保神社の祭祀の分析から―」『宮座と幕制の歴史民俗』吉川弘文館、二〇〇五年
- (28) 和歌森太郎『美保神社の研究』国書刊行会、一九五五年
- (29) 『上鴨川住吉神社の神事舞』兵庫県加東郡教育委員会、一九八一年、『上鴨川の民俗誌』東京女子大学民俗調査団、一九九八年など
- (30) 萩原秀三郎『神島』井揚書店、一九七一年、『神島の民俗誌』東京女子大学民俗調査団、二〇〇一年など
- (31) 一九六三年の文化財保護委員会（現文化庁文化財部）による予備調査を経て、一九六五年から各都道府県教育委員会によって実施された水没地域の民俗資料緊急調査報告の類のほか、成城大学民俗学研究所編刊『山村生活五〇年その文化変化の研究』（前掲注19）でも水没対象地区について調査報告がなされている。水没前後の村ごとの対応を詳細に描いた田中宣一『徳山村民俗誌―ダム水没地域社会の解体と再生―』（慶友社、二〇〇〇年）、田村善次郎・香月節子『ダムに沈んだ村の民具と生活―広島県高田郡八千代町土師―』（八坂書房、二〇一一年）など。
- (32) 関沢まゆみ「昭和三〇年代初めのダム建設と集落移転」『国立歴史民俗博物館研究報告』（高度経済成長と地域社会の変化）、二〇一八年予定
- (33) 有賀喜左衛門「日本常民生活資料叢書 総序―渋沢敬三と柳田國男・柳宗悦―」『日本上院生活資料叢書』第一巻、三二書房、一九七二年）では、多くの研究者を支援し育てた渋沢敬三の人柄について祖父渋沢栄一から受け継いだ近世武蔵農村の庄屋をつとめ、村の先達として高い気概をもっていた、そのような親方百姓的な精神を受け継いでいたと述べている。
- (34) 鈴木政市編『樽床村誌』西樽床記念報徳社発行、一九七〇年
- (35) 柳田國男「山立と山臥」『山村生活の研究』国書刊行会、一九二八年
- (36) 大塚正一記録『只見ターザン マタギ一代』関沢「田子倉の生業関係資料」前掲注16所収